

成功スパイラルへの道 第9回

小石原 健介 (E 8)

事例：その17

昭和39年6月、関西汽船所属の‘ころんぼ丸’4,983トンはラワン材の積み取りのため目的の錨地を目指して海図が整備されていないフィリピンミンダナオ島ダバオ湾奥深くを音響測深儀と甲板手が投げ込む測深用ロープで水深を実測しながら微低速で航行していました。万一座礁に至れば手の施しようがありません。船内には異常な緊張が張り詰め、長時間かけてやっとの思いで目的地に投錨することができました。湾内には既に日本船が数隻投錨しており、ラワン材の荷役が盛ん行われていました。当時筆者は員外（四等）機関士として初めてのラワン材積み取り航海でした。特にこの地域は武装した山賊やモロ解放戦線のゲリラが出没し著しく治安が悪いとの理由から日本船主協会、海員組合より上陸することは固く禁じられていました。

投錨するや否や浅岡泉機関長から船内野球大会をするので当直要員を残し、全員上陸の準備をするよう指示がなされました。当直機関士についても万一デッキウインチその他にトラブルが生じた際は甲板員が汽笛を鳴らして合図をせよとの指示がなされ、揃って上陸することになりました。心配する益山船長に対して機関長は「ここは子供たちの国だよ、心配することはない」との言葉をかけていました。間もなく上陸用の通船が本船に横付けされタラップが下ろされバックネット、バットその他の野球道具を手にした一団が通船に乗り込み陸へ向け走り出しました。上陸を禁じられている他船では多くの船員がデッキからわれわれの通船を見送っていました。

この日は船内の厳格な階級や職制から解放され、野球で存分に活躍した者が尊敬と賞賛を受けることとなります。一番若いメスルームのボーイも大活躍で一刻の英雄気分を味わっていました。やがて夕暮れが迫り南国の真っ赤な夕日が水平線に沈む時刻となりました。野球を楽しんだ一団は先に帰船し、機関長は、渡辺潤二等機関士と筆者に対し「自分はこれから市長の所へ行くので君達はもう少しここで遊んで帰船するように」と言い残し立ち去って行かれました。日没とともに暗闇が迫り裸電球の下には大勢の現地人が次々と集まってきました。やがて椰子の地酒が振舞われ歌や踊りの賑やかな酒盛りが始まりました。しばらくして小銃を手にした2名の制服警官が現れ二人に近寄ってきて「その心配はないがグレートボスの命令で護衛にきた。」と語りかけ酒を勧めてきました。事情を知っているのか二等機関士は落ち着き払って筆者に「皆と一緒に酒を飲んで大いに歌えば良い」とハッパをかけました。酒もかなり入り当時流行していた三橋美智也の古城を大声で歌い、集まった現地人から思わぬ喝采と歓迎を受けました。どれほどの時間が経過したのかやがて指示を受けた迎いの通船で二等機関士と帰船すること

ができました。

ラワン材の荷役は何処からともなく筏に組まれたラワン材が次々と本船の舷側へ集められます。筏に組まれたラワン材の一本一本は必ずしも一様ではなく中には沈木や船上に吊り上げるのがやっとの巨木も含まれています。船上ではデッキウンチが唸りを生じ、縦横に張り巡らされたワイヤーロープを利用して吊り上げられたラワン材を船倉の所定の場所に取り込む作業が行われます。現地人作業員は連日デッキの隅に寝泊りし昼夜を問わず危険な作業が続けられます。乗組員にとってもこの荷役期間中は荷役機械のトラブルや巨木の扱いを誤って船体や設備に傷をつけるトラブル、現地人作業員とのトラブル、さらに海賊の襲撃などに備え一瞬の油断も許されない緊張が続くこととなります。時には乗組員と現地人作業員とのトラブルで大乱闘に至って身の危険を感じ、乗船官吏が拳銃をぶっ放して騒ぎを治めた類の話は乗組員から良く聞かされていました。幸いにして今回は何らこの種のトラブルもなく、ラワン材は船倉からデッキの上まで高く積み上げられ、荒天時の航海中の荷崩れに備えて甲板部員による積荷の厳重なラッシング（固縛作業）作業が始まります。やがて‘ころんぼ丸’は抜錨し、未だ荷役作業の終了しない数隻の先船を尻目にラワン材を満載して帰航の途につきました。

昭和 39 年 5 月 30 日大阪港での‘ころんぼ丸’乗船から同年 9 月 10 日に下船するまでのほんの短い乗船期間でしたが、次航海における基隆、高雄、香港、マニラ、シンガポール、ペナン、バンコックなどの各寄港地での出来事や船内業務を通して浅岡泉機関長より、**人間の視野の広さと発想の柔軟さやモラルの高さなど**、数々の得難い薫陶を受けることとなります。そしてこれらは筆者にとってその後の「**成功スパイラルへの道**」の**ルーツ**となりました。ミンダナオ島でのラワン材積み取り航海での船内野球大会は機関長が乗組員へ与えてくれたいっぷくの安らぎでした。碇泊中機関長は殆ど在船されることはありませんが、離れた場所から荷役作業の進捗状況や安全確保などについて全ての状況を一部始終把握されており、出航が近づくと何処からともなく帰船されるのが常でした。2名の警官が語った‘グレートボス’とは他ならぬ機関長です。また多くの先船に優先して荷役を終了させ帰航したのもフィリピン当局と機関長との特別の関係によるものです。

いかなる既成の枠にもとらわれない自由闊達な発想、大胆にして細心の備え、何人をも包み込む慈愛に満ちた包容力、東南アジアの各地に張り巡らされた要人との人的ネットワークと情報収集力、人間として桁外れのスケールの大きさ等々、かつての明治のエリートたちを彷彿させるグローバルで理想のゼネラリスト像から「成功スパイラルへの道」に近づくための多くの暗黙知を学ぶことができました。

事例：その18

昭和39年8月、「ころんぼ丸」は台湾基隆を経て高雄港岸壁に接岸しました。当時の台湾は、その年の2月に行われた蒋介石総統と吉田茂元首相の会談で合意された「吉田書簡」を巡り中国大陸と台湾海峡の緊張が急速に高まる中であって、戒厳令が布かれていました。このため本船の接岸とともに乗船官吏が乗船し乗組員全員と船員手帳との照合による首実検がなされていました。乗船官吏によるチェックが始まりましたが、浅岡機関長は既に下船をされたのか船内に姿が見えません。しばらくして帰船された機関長に事務長が不在時の騒ぎを報告すると一言「乗船官吏を自分の部屋に呼んでください」と指示し、呼ばれた乗船官吏へ日本と台湾の友好関係について懇々と説明し、首実検の無用を説かれました。乗船官吏は相手の威光にただ頷かざるを得ませんでした。そして機関長は事務長に対し今晚彼は11時に交代をするので帰る際に熱帯地方では貴重品のリンゴの籠を手渡すよう指示をされていました。

寄港地での恒例行事となっている野球大会がその日は高雄市の市民球場で「ころんぼ丸」対「台湾海軍」との間で親善試合として行われました。「ころんぼ丸」チームには高雄在住で河合楽器駐在のアマチュア野球で鳴らした剛球投手の某氏が助っ人に加わり好ゲームを展開しました。その夜は恒例になっている高雄の「浅岡会」が開かれました。場所は高雄市塩埕区にある大新百貨公司横の路地を少し入ったところにある柳さんの英雄体育用品公司です。メンバーは浅岡機関長の高雄寄港を心待ちにしている地元の実業家、医者、弁護士、役人、校長など様々の職業の高雄、台南在住の知識人が集まり、「ころんぼ丸」から運び込まれた日本酒、神戸肉の「すき焼き」を囲んで日本統治時代の話や政治、経済、世界の動きなどについて全く時間の経過を忘れての話しが続きます。メンバーの中に「月さん」と呼ばれ、一際目立つ、見るからに聡明な若い美人がテキパキと出席者の世話をされていました。彼女は当時大新百貨公司の経理を任され、浅岡機関長からは実の娘のように呼ばれ、後に台湾では立志伝中の人物となる呉耀庭氏の第二夫人となった呉宣静女史です。

その後20年の歳月を経て筆者が中国鋼鉄公司向け製鋼工場建設プロジェクトの建設所長として高雄在任中、呉耀庭一族は大新百貨公司、大統百貨公司、大立百貨公司などの百貨店やスーパー、華王大飯店などのホテル、10万頭の養豚牧場などを経営するオーナーとして繁栄を極めていました。高雄在任中には呉宣静女史から幾度か招待を受け華王大飯店で彼女が父親のように慕っていた浅岡泉氏の話、経営者としての哲学や苦勞話、複合民族が共存する複雑な台湾の内情などについて多くの教えを受けることができました。

浅岡泉機関長は大阪商船時代から若くして傑物として衆目され、戦前は七つの海を航

海し、戦中は戦時措置として海運各社と全日本海員組合が大同集結して作られた海運報
国団の軍用船舶への物資補給を行う基地としてジャワ島に設けられた特務機関（大陸の
児玉機関に相当する）の施政官を務めた人物です。戦火の最前線にあって生き長らえた
自分の戦後の人生は余禄のものであるとよく語っておられました。ちなみにシンガポー
ルに設けられた軍用船舶への物資の補給基地で施政官を務めた人物が友貞甚輔関西汽
船社長でした。

筆者が関西汽船に入社した頃、海運業界は海運市況が急落し、借入金の返済はおろか、
利子の返済も出来ないほど収益が低下し、国家主導による海運業の集約・再編成が実施
された激動の時代でした。すなわち昭和 38 年 7 月公布の「海運業の再建整備に関する
臨時措置法（海運再建整備二法）」に基く政府助成措置を受けるため、わが国の主要外
航海運企業 12 社が 6 グループに合併集約されました。関西汽船はこれらの集約には参
加せず低迷する海運各社とは異なり唯一配当を続け、最大手の日本郵船と並ぶ 40 隻の
運航船舶の保有を誇り社運の絶頂期にありました。当時社内では友貞社長と浅岡天皇と
は両雄並び立たずと噂をされていましたが、これ程までの人物が晩年別格とは言え機関
長として乗船されておられた理由をわずかに測り知ることができました。

台湾での戒厳令下で乗船官吏による船員手帳と本人との照合を拒否されたのは大東
亜繁栄圏のジャワ島で施政官として絶大な力を発揮してきたグレートボスとしての誇
りによるものかも知れません。またマニラ碇泊中には英会話の勉強に連れて行こうと言
われて招かれたフィリピン政府高官アライオン氏の邸宅には何時来るか分からない機
関長のために立派な専用の部屋が設けられていました。そこに集まってきた大勢の家族
に囲まれ日本の伝統文化や皇室などについて実に流暢な英語で楽しそうに話しをされ
ている姿から真の国際親善が何かを教えられました。

人間として桁外れのスケールの大きさ、接する誰もが畏敬の念を禁じえなかった浅岡
泉氏は筆者にとって生涯の師と仰ぐ人物でした。**その深い暗黙知のマネジメントの真髓や
「武士道」精神の根幹である「実践」することの大切さ、高潔な美学、「ノーブレス・オブリー
ジュ(noblesse oblige)」**など人間としての多くの薫陶を得られたことは筆者にとって幸運
以外のなにものでもありませんでした。

以上